

児童教育を支援する
「博報財団」が、すぐれた
取り組みを顕彰する

第49回「博報賞」受賞

国語・日本語教育部門

大分県 ● 臼杵市立臼杵小学校

「読む子は伸びる」
ことを確信し、
郷土への想いを
学習を通して深める

悠久の歴史を刻む臼杵市の教育ビジョンは、郷土の「郷育」、協力の「協育」、響き合いの「響育」の3つのきょう育を通して、学び力・誠実さ・たくましさを身に付けて「臼杵大好き」「臼杵っこ」の育成だ。中でも、郷土の「人・もの・こと」を活用した「ことば」の教育に、先鋭的に取り組むのが臼杵市立臼杵小学校。日本を代表する作家の一人・野上弥生子を輩出した学校だ。

「これからの時代を生き抜く力をつけるには、多くのことばと出会いながら、自分を磨くことが求められます。臼杵市ならではの、人・もの・ことを活用して、郷土を愛する心と国語力の両輪を育てることを目指しています」

絶えない。
「昨日借りたのはもう、読んじゃったから、また借りに来たよ」
子どもたちは学校司書に気軽に話しかけ、笑顔のやりとりが続く。学校司書は、「この子は、こういう本が好き

だったなど、一人ひとりを覚えていたので、次はこんな本はどう？とすすめることもよくあります。年間300冊も読破する子もいるんですよ」と語る。

学校司書の存在もまた、図書室の居心地のよさにつなが

り、子どもたちの本への親しみの芽を育てている。
多くの「ことば」の出会いの中で育つ「臼杵大好き」「臼杵っこ」

での授業の際にも、担任と学校司書が協力して必要な図書を教室に準備。教科書にとどまらない学びが子どもたちの「読む」意欲を伸ばす。



図書委員の3人は、歴史や動物ものなど、おすすめの本を紹介してくれた。

野上弥生子から贈られた手紙が飾られた校長室で、桑原校長は静かに語る。

「ことば」の教育に力を注ぐきっかけは、国語力低下への危機感があったと振り返るのは山本教頭だ。臼杵市も、学校図書館専門員（学校司書）を各校1名配置するなど、市を挙げて「うすき読書のまちづくりプラン」を推進。幼少期からの積極的な読み聞かせ活動と同時に、小学校の読書活動推進のための環境整備が行われ、蔵書のデータベース化や国語科の授業改善も進められた。

大きな窓から光が差し込む臼杵小の図書室。休み時間になると、貸し出しカウンター前には、子どもたちの行列が

「子どもたちは、ことばを通して人に伝える経験を積み、ことで自信をつけていきます。体験と読書の連動が子どもたちの『ことばの力』を育てていくのです」と桑原校長は力を込める。臼杵小では、教室

校内で本年度上級認定合格を果たした6年生の女子児童は、2年連続の快挙だ。1度の合格でもガイドの資格は得られるが、あえて再度のトライをした理由を聞くと「野上

読書を通して「ことば」を育むことは、本物の力となる。臼杵小の実践は、子どもたちの中に、確実に根をおろしているようだ。



図書室では「学校図書館活用授業」として、3年生の国語の授業が行われていた。子どもたちは、大きな机に参考となる辞典などを広げ、活発な意見交換を行っていた。

郷土の「人・もの・こと」を活用して すすめる「ことば」の教育

～うすき読書のまちづくりを通して～

国語力の育成と共に、郷土愛を育む臼杵市立臼杵小学校。
優れたことばの教育に対して贈られる、博報賞の国語・日本語教育部門を受賞した取り組みを紹介する。

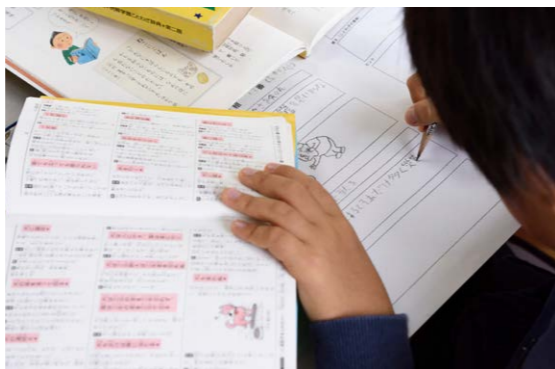
推薦者 お祝いのことば

「一粒の真珠は、他のけばけばしい宝石より、より貴重なものとされます。資源や土地の乏しい臼杵とても運営しだいで、よそでは欲しくとも手に入らぬ九州東海岸の真珠に育てあげられるはずです。……」文化勲章作家野上弥生子が、母校の臼杵小学校に贈った手紙の中の一文です。臼杵市では、彼女のこの想いを大切に、郷土の「郷育」、協力の「協育」、響き合いの「響育」の「3つのきょう育」を通して、「臼杵大好き」「臼杵っこ」を育てています。今回の受賞を市全体の受賞と受け止め、ことばで響き合う「ことばの響育」をさらに深めていきたいと考えています。

大分県臼杵市教育委員会
齋藤克己 教育長



「臼杵っこガイドとして、外国の高校生にも説明をしました。仏様のやさしいお顔を、ぜひ見に来てください」と、「伝える力」も豊かだ。



ことわざ辞典で調べながら、クイズの素材を探していく。



体験と読書の連動が大切と、桑原幸八郎校長。